

第9号

発行
H19年1月5日

- ☆ 発足八周年記念講演 1
- ☆ 総会報告 4
- ☆ 当会の現状報告 5
- ☆ 勉強会報告 5

- ☆ 次回記念講演のお知らせ 7
- ☆ 勉強会と講演会のお知らせ 7
- ☆ 次年度総会のお知らせ 8
- ☆ 実行委員のこころの小窓 8
- ☆ 編集後記 8

発足八周年記念講演

内藤 いづみ 氏

『いのちを囲むもの』

—今こそ看取りを皆で考えよう—

第八回「みえ生と死を考える市民の会」記念講演は、七月二日(日)に開催されました。熱心に在宅ケアを実践されているふじ内科クリニック(甲府市)の医師であり、日本ホスピス・在宅研究会理事の内藤いづみ氏をお迎えしました。ご自分の経験や出会いを交えながら、終末期の患者さんとご家族の気持ちを大切にされたケアや、終末期の患者さんの在宅療養の大切さについて、お話ししていただきました。以下にその内容を紹介いたします。

ホスピスケアと呼ばれているものが、二十数年前にイギリスで生まれました。そのとき中心人物だった女医さんがいます。シシリー・ソンドラスさんです。一、二年前にお亡

くなりになりましたが、その方が世界中の看護師の心を動かしたのです。なぜなら、ソンドラスさんは医者になる前、看護師でもあったからです。ソンドラスさんは、いくら看護師が勉強しても、お医者さんが一生懸命チームの一員として患者さんを診てくれなければ、そこに力は生じない、患者さんを支えることはできないということを知っているお医者さんでした。看護師の力を非常に尊重して発展させてくれたお医者さんが、ホスピスを三十年ぐらい前にお作りになったのです。ホスピスケアは、もちろん体の痛みを緩和するということが一番先にくるけれど、体と心と社会的な痛みと、最後にくるスピリチュアル、魂の痛みに向かい合うものだということ、つまりトータルペインと向かい合うケアだということ、ソンドラスさんは徹底的に私たちに教えてくださったのです。それは皆さんの耳にもどこか入っていることと思います。

でも、この魂の痛み、スピリチュアルペインというのは大変難しい分野です。私たちもよくわからない。二十年ぐらいこの仕事をしています。一体どこからスピリチュアル

ペインなのか、何が魂の痛みなのか。でも、あるときわかりました。それは、相手が苦しむとき自分たちも苦しむのだということ。患者さんが苦しんでいるときに、家族も苦しむ。それを助けようと思う私たちも苦しむ。少しづれるけど、苦しむのだということ。を学びました。

いのちを



スピリチュアルペインに向かうスピリチュアルケアのなかで、死を迎えるまでの五つの課題と言われているものがあります。一つ目は、長い人生を振り返るとのこと。振り返るといのは、結構あつという間にできることもあるし、どこかで引つかかると、なかなかできないこともあります。でも、どこかで引つかかったら、その引つかかった場所は何だろうと、ちよつと考えてみて、そのときに、自分の人生の価値を考える、見いだすということです。そうすると、自分がいま幸せかな、それともちよつと不幸せかな、ちよつと惨めかな、ということを考えることになります。そのときに、その元になる原因は一体過去のどこにあるだろうということに気づかされまます。たとえば「私はいい妻じゃなかったけど、いい母親だった」とか、「いい嫁じゃなかったけど、いい妻だった」とか。いろんな自分の価値、それは小さくても大きくてもかまわないですけれど、その価値を見いだしてかみしめるのです。

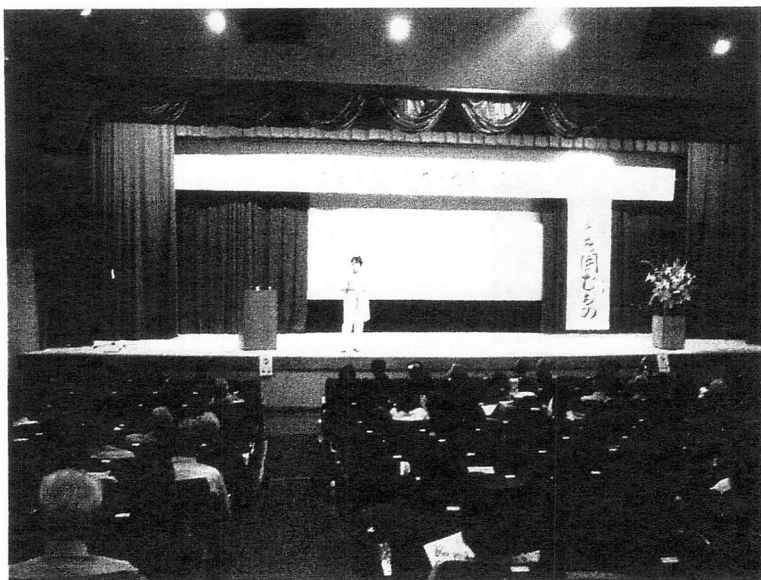
二つ目は、自分を許すということ。つまり、自分の価値をかみしめてみたら、逆に自分の欠点も見えてくることがあります。ここを直して人生を送りたかったなとか、ここがいつも引つかかって、人とうまくいかなかったな、とか。ヒョツとすると、その気づいたことは、皆さんの個性かもしれないですけど、その欠点を許すのです。許せますか。今日は私が許すので許してあげてください。

三番目は、他人を許すということ。すると「先生、そんなこと言っても、死んでも許せない人がいます」などと言う、ちよつと困った人もいます。私にも許せない人はいました。みんな「あの人に自分の人生を台無しにさせられたんじゃないか」とか、「あの人の嫁じゃなかったらもつと幸せになったんじゃないか」とか、いろいろなことを思うものです。その人をまず心の中で許す。それができたら、だんだん口に出して許す。そうすると、ずいぶん楽になります。

四つ目は、「ありがとう」と感謝の言葉を必ず口に出してということ。「ありがとう」とともに「私は幸せだ」という言葉を付け加える。今日は女性の参加者が多いですが、男性の会では特にここを強く言います。日本の男性は、言わなくてもわかると思っている人が多いです。でも、女性は言います。だから、男性にも言ってもらわなければわからない。ですから、これから練習です。「ありがとう。本当に君がいて助かったよ」と。そして「本当に君のことを好きだよ」と。今さら言えないという人もいます。もう五十年連れ添って、今さら「お前のことが本当に愛しいよ」などと言えないかもしれない。でも、そういうことを口に出して言う練習をする。これだけ開かれた社会になって、そういうことを言わないでいると、やはり気持ちは伝わらないのですね。ですから、皆さん伝えてください。

最後に五つ目は、別れに際して「さよなら」

をきちんと言うこと。これも、そんなこと言えないよ、という反発心が皆さんのなかには出てくると思います。でも「さよなら」をきちんと伝えられた家族は、悲しみの淵からはい上がる力をもらうのです。「さよなら、本当に君と出会えてよかったよ」と。「さよなら」ということを伝えるという大仕事を、もし死に逝く方ができたら、その方の人生は大変すばらしいものだ、私はいつも家族にお伝えしています。



私が医学部に入って、医学の勉強を始めたときには、病氣や臓器のことは一生懸命教え

でもらったのですけれども、病気や臓器をもっている「人間」をどうやって支えたらいいのか、その人間と、医療者になろうとしている私たちが、どのようにコミュニケーションを取ったらいいいのか、看護師さんたちとどうやって仲良く仕事をしたらいいのか、そういうことの教育は何もありませんでした。非常にそこが割り切れなかったわけです。そういう中で様々な患者さんと出会いました。東京に三井記念病院という、政治家が入ってくるような病院があります。しかし、一泊二十万円もするような個室に入っているにも、どなたも孤独に亡くなっていくという非常に非常に痛みました。なぜなら、ご本人が何にも知らされていないからです。ですから、ご本人に対して私たちが「これからどうしましょうか。何が一番大事ですか」という質問は何にもできませんでした。

これで本当にいいのだろうか、自分の家族だったらこれでいいのだろうかという疑問は、二十数年前若い医師の私を非常に悩ませました。その後、大学病院に移ったときに、婦人科系の病気で転移して余命三カ月と言われた二十三歳の女の子と巡り会いました。当時私が二十五、六で、私の妹ぐらいの歳です。その子は非常に利発で、たぶん生きていたら芥川賞取っていたかもしれないと思うくらい、たくさん文章を書く子だった。だから、作品や日記が家に残してある。そのときその子の両胸には一本ずつ太い管が入っていて、

血の混じった胸水を抜いていたのです。熱も出ていました。とても家に帰れるとは思わなかった。でも、その子が「内藤先生、あのね、私自分の病気のことは大体わかります。だから一回家に帰りたいの」と言ったのです。「どうして帰りたいの？」と聞くと、「何も片付けをしてこなかった」と言いました。「何の片付け？」「私は日記をだれにも見られたくない。私は小説家を目指しているの。だからたくさん書きためておいたものがある。あれは自分の手で始末しなきゃいけない」そう言ったのです。私は「そう。じゃ、何とかそれをかなえるようにしようね」と言ってお父さんとお母さんに相談しました。すると、ご



両親は「娘の望むことをかなえるのが親の仕事だ」と。そのとき、あまり効かないかもしれないけれど、取り寄せた新しい抗がん剤を使う、という選択肢を付けて家に帰るということをしました。彼女は家に帰りましたが、連れて帰ったら「帰ったあと誰が支えるの？」ということに気づいた。私は「自分で言いだした以上、二十四時間いつでも私が診ます」と言って定期的に往診したのですけれども、当時は手伝ってくれる看護師さんもないし、無理やり退院してきたから病院も協力的ではありませんでした。でも、そういう状況の中でも彼女は落ち着いて家にいました。あるとき彼女が「先生、お父さん困るのよ。お父さんね、夜中に泥棒みたいに私のところに来て、私の鼻のところにくっついて手を当ててね、息をしているかどうか確かめるのよ」と言うから、「ワッ、て脅かせばよかったじゃないの」と言ったのですけれど、そういうことをしながら、お父さんもお母さんもお母さんに悲しい。でも、一緒にいられるという喜びのなかで三カ月を過ごして、お母さんに抱かれて家で亡くなっていました。

でも、そのとき私はたった一人だったから、本当にくたび果てました。仲間の看護師さんがときどき助けはくれたけれど、私が何をやっているかということだけはだれも理解してくれない。当時は、大病院から出て家で寝ているということは、患者の可能性を否定することだという意見のほうほとんどなわけ

す。でも、それを二十数年前に選んでくださったご家族に感謝して、私は、このようなことを、それを望んでいる人に行うことができたらと、もう三十年近く前になりますけれども、そのとき感じました。

その後、縁があつてイギリス人と結婚し、仕事で渡英する彼についてイギリスに行きました。一九八〇年代の中ごろで、イギリスではホスピス活動が市民を中心に全国で広がっていました。それが、それを行うのは病院ではなかつたのです。「病院ではないのですよ、内藤さん、命を医療から自分に取り戻すこと。その取り戻した命を、みんなで支えることです」と言われました。現在、ホスピスはイギリス中にあると思うのですけれども、数の上では日本の緩和ケア病棟のほうが、おそらくイギリス全土のホスピスより多くなっています。内容もかなり発展していると思います。でも、当時イギリスから富士山のある山梨に帰ってきて私が講演をしたときに、男の先生方はほとんど無関心でした。私が経営上成り立たないと言ったのが、敗因だったと思います。やりがいがあります、で押し通せばよかつたのですけれど……。女の先生たちは私のところへ来て「内藤さん、悪いけどそれ医療じゃないわね」と言いました。「医療者というのは、命を救うのが仕事でしょう。それなのにあなたは、勢いをつけて崖から患者さんを突き落とすようなことをしている」と。それを聞いて、ひどいなと思いました。でも、今ではそ

ういう人たちが緩和ケア病棟を開いたりしていていますから、世の中は、患者さんや家族の、「必要だ」という声によつて、たぶん変わるのです。ですから、皆さん、三重という海あり山ありのこの県で、自分が希望したらそれを百パーセントかなえられるような方法を、ぜひその道を見つけてください。あきらめたら、おしまいだと思います。

私は命を看取るという仕事をしていて、その仕事は本当に最後の友人としての出会いであるような気持ちがあるときがあります。だから、最後の友人として、お葬式に参加することもときにはさせていただきます。



オープニングコーラス アンサンブルGG

先ほど、トータルペインに向かうケアということを言いました。体と心と、そして、社会性とスピリチュアル、魂です。でも、これは患者さんだけでなく、患者さんを支える医療者にも必要なことだということを、私はよく話します。家族についても同じです。医療者や家族が疲れるのは当たり前です。このトータルペインを患者さんと一緒に抱えているからです。だから、それを見極めて、もし疲れすぎたら倒れる前に、十分なお休みを取るように気配りをして、大変ではあるけれども、やりがいのあるこの仕事を続けていただきたいなと思います。患者さんにとつても、ご家族にとつても、亡くなるということは悲しくつらいことですが、「君たちと一緒にでよかつたよ」という言葉が多少なりとも残せるような最後、そういうことが家でもホスピスでも病院でも、いろいろなところで可能になるような、優しさの際だつ社会になることを願っています。

第九回総会報告

記念講演入場者 計 三〇五名

第九回総会 議事録

日時 七月二日(日)

場所 三重県教育文化会館第二会議室

1. 会長あいさつ(武村)

2. 総会の司会指名(西出)

3. 平成十七年度活動報告(辻川)

4. 平成十七年度決算報告 (大石)

収入 694,657 円

支出 543,097 円

差引残高 151,560 円(次年度繰り越し)

5. 平成十七年度会計監査報告 (松井)

(会計監査 松井妙子氏、島田かおり氏)

6. 平成十八年度活動計画案 (辻川)

7. 平成十八年度予算案 (大石)

収入 701,560 円

支出 701,560 円

8. 規約の改正について

勉強会参加費についての修正と事務局の住所変更の改正案が提案されました。

《改正後》第五章会計 第十一条第二項

講演会および勉強会に際しては、若干の会費を徴収する。会費はその都度定める。

(平成十八年七月二日より施行)

《改正後》第六章事務局 第十三条

本会の事務局は、津市江戸橋二丁目一七四番地国立大学法人三重大学医学部看護学科内におく。(平成十八年三月一日より施行)

9. その他

〈新役員〉書記 大市三鈴氏

会計 平松万由子氏、種田ゆかり氏

〈新運営委員〉上野恵美子氏、喜田園子氏、中 広子氏、平松万由子氏

* 以上の点について、資料に基づき報告がなされ、全て承認されました。

当会の現状報告

平成十八年は、「みえ生と死を考える市民の会」にとって、激動の年になりました。記念講演の企画運営を市民の手に委ね、関連する勉強会も二回開催しています。市民パワーの大きさと温かさを目の当たりにした一年でした。実行委員とボランティアの人たちの活動について、まとめました。(編集委員)

平成十七年

九月

記念講演実行委員会の立ち上げ
(実行委員長遠藤太久郎氏ほか、実行委員十名により結成)

平成十八年

二月十九日

平成十七年度第二回勉強会の企画・運営(記念講演に向けての学習を兼ねた勉強会)

(於 白子公民館)

五月二十一日「大集合 皆が手持ち五分で

まず語ろう!三重の緩和ケア、私ならこうしてほしい!」の

企画・運営(於 三重大学)

七月二日

記念講演の企画・運営
内藤いづみ氏「いのちを囲むもの」
(於 三重県教育文化会館)

プチひまわりの編集・刊行
(記念講演 配布資料)

十二月現在 実行委員十五名

次回記念講演の準備中

勉強会報告

平成十七年度

●第二回勉強会(平成十八年二月十九日)

記念講演に向けての学習を兼ねた勉強会
(約八十名が参加、絵本の朗読、尊厳死や家族の看取りなどについてのお話と質疑応答)
(於 白子公民館)

●第三回勉強会(三月十二日/共催)

「がん患者とサポーターの集い」
主催 三重県健康管理センター
(於 津アストホール)

平成十八年度

●第一回勉強会(五月二十一日)

「大集合 皆が手持ち五分でまず語ろう!三重の緩和ケア、私ならこうしてほしい!」(約五十名が参加、参加された医師の方々から、様々なご意見をいただきました)一般の方からの主なご意見(アンケート)
・患者、家族、一般、ボランティア等、もつと多様な分野の方の発表があるとよい。

・様々な人たちが対等の関係で組織する、
県内全体に拡がる市民運動体となること
が、この会には必要ではないか。

(於 三重大学医学部看護学科講義室)

●共催 秋の勉強会 (九月二十二日)

▽主催 名張市がん・難病相談室

講師 原田雅典氏 (三重県こころの医療
センター院長)

(於 こころの医療センター)

●第二回勉強会 (十一月十二日)

「脳死を巡る生と死

—日本と欧米 アイデンティティ概念を
巡る東西文化の違い—

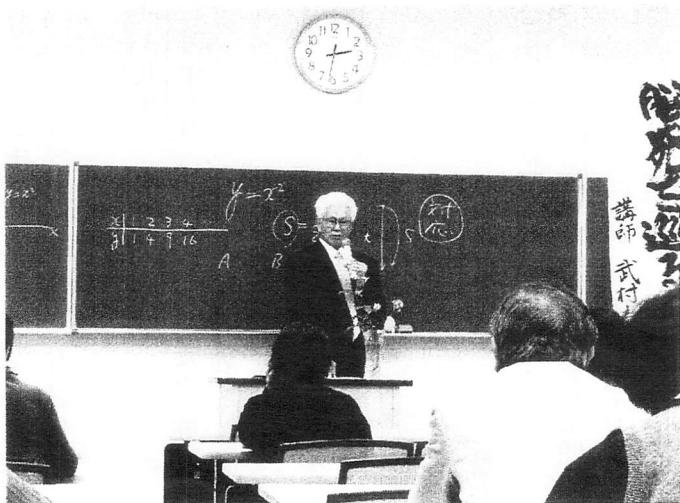
講師 武村泰男氏 (鈴鹿国際大学学長)

(於 三重大学医学部看護学科)

※前回勉強会において「哲学的な話が聞きたい」との要望があり、開催しました。

【講師による講演内容の要約】

脳死(7頁の*参照)を巡る論議はひとこ
ろ盛んに行われたが、いまのところ議論自体
は収まっている感じである。しかし、このこ
とによって脳死を巡る諸問題に関し一定の
合意が得られた、と言えるかといえばなか
かそうはいかない。臓器移植の実施に関する
日本と欧米との温度差が少しも縮まってい
ない事実を見ても、いまだ未解決の問題が多
いことが分かる。



そもそも脳死問題は、医療技術の進歩によ
って、他人の臓器を移植することが可能にな
ったことに由来する。つまり臓器移植におい
てはなるべく新鮮な臓器が要るので、そのた
めには「死んで」すぐの臓器が望ましい。と
なると、問題は「死の宣告」にある、という
ことになる。

つまり、個体の死とは何か、が問題となる
のだが、ここにさらに二つの問題がある。ひ
とつは個体の死とは何か、言い換えれば個体
の生命とは何か、ということである(個体の、
という語が付着すること自体問題があるの
だがそれについては後述する)。もうひとつ
は死つまり生命の終わりの定義ができた

して、ある個体の生命の終末をどのように判
定するか、という問題である。

およそ個体の生命活動の死、つまりその活
動の不可逆的停止の判定を非常に早期に行
うというのは困難を極める話である。ある機
能が停止して決して元に戻らない、という判
断は、遺体が灰になっっている、とか、腐りき
ってしまったっている、というのなら異論はない
であろうが、新鮮な臓器を確保しようという
意図の下で、できうる限り早く死を決めよう、
となると大変なことである。しかしこの点は
医学分野の課題として今回の主題ではない。

ここでの主題はもうひとつの問題、つまり
個体の死とは何か、を考えることである。さ
らに言えば人間の個体死あるいは一個の
人間の生命とは何か、を考えることである。

古来様々な思想がこの点に関して展開さ
れてきたが、それを詳述している紙数がない。
それで脳死に関わる二つの重要な思想のみ
を紹介しよう。ひとつは心身二元論、もうひ
とつは有機体説ないし全体説と言われるも
のである。前者は人間個体の生命を精神と身
体の二つの要素からなるものと考える立場、
後者は精神と身体とに分けるかどうかは別
として、その構成する全部分の総合性に注目
する。脳死に賛成する立場は、心身二元論に
立つ場合は精神こそが人間を人間たらしめ
る本体であるとみなし、その精神の宿る場
である脳がやられればもはや生きた人間では
ない、と考える。全体説に立つ場合はその総

合性を司るものは脳だとし、やはり脳をやら
れれば個体は死んだと見なしてもよい、とい
うのである。

心身二元論はまさにデカルトに始まる近
代欧米思想そのものであると言える。脳死賛
成論の主役を占める人格論は人間を人間た
らしめるものは精神でありその発現である
人格だと主張する。それは現代の人権思想や
デモクラシーの概念の根拠となる個人主義
そのものでもある。全体説の中で脳を中核に
据えるのも同じ根に端を発していると言っ
てよからう。

しかし、全体説にあつては、免疫概念から
必ずしも生命の主役が脳とは限らないとい
う思想も存在するから、全体説支持即脳死支
持というわけではないところが微妙である。

さらに、近代欧米思想というレベルから少
し距離を置くと、また新しい見方が出てきそ
うである。前述のように、デカルト的自我は
近代欧米思想の根幹をなしているが、この自
我がときにアイデンティティという語とセ
ットになって使われる。自我の同一性がすべ
ての根底にある、という考え方である。

そもそも昨日カレーを食べた自分、十年前
に退職した自分、六十年前に小学校で喧嘩を
した自分、がなぜ「同じ」自分なのであるか。
物質的には、六十年前の自分と今の自分とは
九分通り別の存在であるはずなのに。頼りは
記憶（自分を巡る自分のないし他人の）すな
わち精神のひとつの働き以外にはない。記憶

を通して自分というものが連綿として繋が
っている、それを同一性というわけである。

しかし、この同一性なるものは、本来は自
我にのみ設定されるものではない。身の回り
のすべての「時間の内において存続が指定さ
れる」存在のその持続性を指す。さら
に、例えば国のアイデンティティ、徳川家の
アイデンティティといった場合、そのなかの
個は独立した最重要な存在というより、個そ
れぞれの連絡性のなかで意味を持った。ある
いは日本人は阿部謹也氏の言うように世間
の内にある。とすれば個の死が独立した個の
死として捉えられるのは、必ずしも人類に普
遍的な把握ではないかもしれないのである。

* 日本医師会の定義にしたがって言えば、
ここで「脳死」というのは、脳（全脳）
機能の不可逆的停止つまり脳の死をもつ
て個体の死とみなす立場、ないしそのよ
うに判定された個体の死を言う。

♪ 勉強会と講演会のお知らせ

◎ 第三回勉強会（二月二十五日／共催）

「がん患者とサポーターの集い」

主催 三重県健康管理センター

（於 津アストホール）

◎ 春の講演会（当会後援）

▽主催 三重聖十字病院

三重聖十字病院は、三重県で二番目に設立
された緩和ケア病棟です。この春、看護専門
学校も開校されることになりました。それを
記念し、ホスピスボランティアと市民を対象
とする講演会が企画されています。

定員百名のため、抽選になることもありま
すが、是非ご参加ください。（事前の申し込み
をお願いします）

1. オープニングミニコンサート

合唱 アンサンブルG

2. 講演（テーマは未定）

講師 沼野尚美氏（六甲病院緩和ケ
ア病棟チャブレン）

ア病棟チャブレン）

日時 平成十九年四月二十一日（土）

午後一時～三時

場所 聖十字看護専門学校

（三重郡菰野町宿野一三四六）

近鉄湯の山線「菰野駅」から徒歩二十分

参加料 無料

☆問い合わせ・申し込み先

三重聖十字病院 ワーカールーム

電話 059(391)0323

◎ 来年度第一回勉強会（講師 未定）

日時 四月二十二日（日）

午後一時三十分～三時

場所 三重県総合文化センター

フレンテみえ セミナー室C

♪ 次年度総会のお知らせ

◆◆日程の変更

当会の総会は、例年、記念講演と同じ日に開催しておりました。しかし、参加者が少なく、実際の会計年度もずれているため、苦慮の末、日程を変更することに致しました。

来年度は運営委員会が行う総会準備を早目に終えて、四月二十二日の勉強会の後に開催しようと計画中です。

来年度第一回勉強会の開催通知とともに、決定した詳しい日時と場所をお知らせします。多くの会員の方々が参加されることを心からお待ちしております。
(運営委員会)

♪ 次回記念講演のお知らせ

日時 平成十九年六月十日(日)

十三時～十五時

場所 三重県総合文化センター

(男女共同参画センター)

「フレンテみえ」多目的ホール

(津市一身田上津部田)

演題 「人生の實力 ―二五〇〇人の死をみつとってわかったこと―」

講師 柏木哲夫氏

(医師、金城学院大学学長)

♪ 施設見学会のお知らせ

日時 平成十九年三月三日(土)

※午後一時、施設の玄関前に集合

施設 しおりの里

(ヤナセメディケアグループ)

津市野田(泉が丘団地から久居高校に

向かう道路沿いに表示があります)

☆☆実行委員のこころの小窓☆☆

* 企画運営する側に回ったら、大変なことがよくわかった。それとともに、「おもしろさ」と「楽しさ」も実感できた。

* いろんなことが重なり合って、すばらしいことができていく。

* この活動で、人の輪が広がったと感じる。

* 経験して、企画や運営の奥深さを実感!

* 企画から関わっていると、記念講演や勉強会への誘いかけも自然と熱心になる。

* 経験しながら、「自信」がつく。

* 以前より、チョッと主体的になった。

* こんな方々に出会えた。嬉しいわ!

・最近連れ合いを亡くされた方、存命中に困ってらしたので講演に誘った。「話を聴いて、うちで一週間過ごせた」、「納得しながら死を看取った」、「連れ合いの死を受けとめている」とのこと。

・夫婦で講演を聴いて「初めてホスピスを知った」という方は、病院からホスピスへ移られたとのこと。

・高齢者施設の職員の方とお母様、「記念講演を聞いて、親子で感動した」そうです。

編集後記

明けましておめでとうございます。会員の皆様、新しい年をいかがお過ごしですか。

前号に引き続き、編集委員による自主制作となりました会報第九号、何とか発刊することができました。一年余り前から、記念講演実行委員会が新しく動き出しています。その躍動感を伝えられる内容にしようと思いましたが、隔々までご覧ください。また、三重県の北勢、中勢、南勢それぞれに、在宅医療の変化の波が見え始めています。その中から、会員の皆様に必要と思われる情報を提供できるように努めます。

当会の財政状況は苦しい状態が続いております。今年度の会費を納入されていない方、一月中の納入をお待ちしております。平成十九年も、皆様の温かいご協力、どうぞよろしくお願い致します。

(編集委員 今泉、西出)

